江藤淳

一族再会

第一部

江藤淳

一族再会

第一部

講談社

一族再会〈第一部〉
昭和四十八年五月二十八日　第一刷発行
昭和四十八年六月二十八日　第二刷発行
著　者　江藤　淳
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇
印刷所　株式会社精興社
製本所　牧製本印刷株式会社
定　価　八八〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
©江藤淳　昭和四十八年

Printed in Japan

0095-126414-2253 (0)　(文1)

目次

母　五
祖母　四七
祖父　一二五
戦争　一九四
結婚　二二二
もう一人の祖父　二四九
あとがき　三〇八

裝幀　著者自裝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

一族再会

〈第一部〉

母

I　言葉と私

私が母を亡くしたのは、四歳半のときである。つまりそれが、私が世界を喪失しはじめた最初のきっかけである。正確にいえば、私が生れたときすでに、私の家族はひとつの大きな喪失、あるいは不在の影をうけていたのかも知れない。父はまだ十一歳のときに祖父を亡くしていたからである。

この祖父については、以前に書いたことがあるから、ここではくりかえさない。母の死をきっかけにして、私は自分の周囲から次々に世界を構成する要素が剝落して行ったように感じている。敗戦や戦後の社会変動がそれに拍車をかけたことは否定できない。しかし、そういう外側の原因だけで私のまわりから現実が崩れ落ちて行ったとは考えられない。少くともひとりの人間が世界を喪失しつつあると感じるとき、その原因を彼の外側にある時代や社会のなかだけに求めようとするのは公正を欠いている。こういう人間にとっては、すでに「時代」とか「社会」とかいう概

念そのものが崩壊して行く現実の一部と感じられているからだ。

だからひとりの人間のなかでおこっていることの切実さを、実状に即してとらえようとするなら、むしろ彼のなかに内在する問題が、私たちが「時代」とか「社会」と呼んでいるものの力で、どのような表現をとることを余儀なくされたかという角度からとらえなければなるまい。それはいわば人間を、歴史を超えたものと歴史との交点としてとらえようとすることである。私たちはたしかに国民として国家に忠誠を誓わされたり、ある集団の一員としてその利益や理想に奉仕させられたりしている。しかし私たちはそのためにだけ生きているわけではない。私たちはまず単に生きているのである。いわば生れて母親に育てられ、父親という最初の他人に出逢い、教育され、やがて自分の家族というものをつくり、そのうちに死んで行く永遠の生物学的存在として。

この事実がまず見えていなければ、実は私たちがかりに「時代」とか「社会」と呼んでいるもの、あるいは「歴史」と呼んでいるものとのかかわりあいも切実なものとして感じられるわけがない。なぜなら私たちは「歴史」のために、ないしは「時代」の理想のために生きているのではなく、生きるために「歴史」や「時代」を呼びよせているからである。ここで「生きる」というのは、もちろん単純な自己保存の欲求のことではない。私たちは「生きている」と感じたいために自己を破壊することもある。そのことをも含めて私たちは生きるために「時代」や「歴史」を呼びよせようとし、あるいは拒否しようとする。

ところで、それではそうして世界を喪失しつつあると感じている私が、生きているのはなぜだろうか。この問題はもちろん簡単には答えられない。しかしおそらく私は、自分から剝落して行

ったものを言葉の世界に喚び集めようとして生きているように思われる。世界を言葉におきかえること――それは実在を不在でおきかえることだ。この言葉はもとより私の言葉でなければならない。もし世界が完全なかたちで実在していたなら、当然そう感じられたであろうような親密な感触を、私とのあいだに持ち得る言葉でなければならない。

私はこの言葉の世界――不在の世界に、自分の一族を招集してみたい。彼らの大部分はすでに死んでおり、そうでない者もなにかの崩壊を体験しつつあるが、そうすることによって私は自分が喪失して来たものの跡をできるかぎり明瞭にたどってみたい。それが一族、つまり肉親でなければならないのは、私たちが肉親を通してしか他人に接触できないようなかたちで生きているからである。そうすれば、多分私は、彼らがそれぞれの「時代」を、どんなやりかたで呼びよせたかを見ることにもなるであろう。またこのことは、とりもなおさず私自身がいったい何者であるのかを問うことにもなるはずである。かりに「私」という一人称で呼ぶほかないこの存在が、一人称が習慣的に指示する約束通りの確乎たる実在であるわけはない。「私」がそれではなにかということを、どうして私が知っているといえるだろう？

それに私の言葉は、それはどこから湧いて来るのだろう？　それがほかならぬ私の言葉だという所以がどこにあるというのだろう。十数年前に私は、たとえば「個人」とか「社会」、あるいは「自然」とか「芸術」という言葉を、さほどのためらいもなくつかい、それらが生きていると感じることができた。これらの言葉はいまでもその頃自分が書いた文章のなかでそれなりに生きている。しかし、それから十数年たった現在、同じ言葉を同じようにつかおうとすると、少しも

生きないのはなぜだろう？　それは自分の文章についてだけではなく、他人の文章についても同様である。以前書かれた文章のなかでは生きている言葉が、現在つかおうとすると死んでしまうのはなぜだろう？　そしてそのことにあまり人が気づいていないように見えるのはどうしてだろう。

これはおそらく批評言語の形骸化とでも呼ぶしかないような現象である。過去十数年のあいだに、私のなかにも他の人びとのなかでもなにかがおこったが、そのことが充分に自覚されていない。あるいは薄々気づかれてはいても直視されていない。そのために人々は形骸化した言語を交換してあたかも共通の概念が実在し、各々にとっての世界が不変であるかのように振舞い、そうすることによってさらに一層死んだ言葉のなかにとらえられて行く。それは批評の自滅ではないか？　いやそれはほとんど生きることをやめるのに等しいことではないか？

多分共通の概念という仮構のかわりに、それぞれが私の言葉というものをたしかめ直さなければならぬ時期が来ている。つまりこれは、概念化されてしまった批評言語を、個人的な言葉のなかで蘇生させることである。「私」とはなにかということを問い、そして「言葉」がそれとどうかかわるかを問わなければならない。私にはそれ以外に現在批評のなし得ることはないように思われる。だがそれならこの個人的言語、つまり私の言葉というものはどこから湧き出て来るのだろう？　その源泉であるはずの薄明の沈黙はどこに存在するのだろう？

このことをできるかぎり厳密に考えようとするなら、やはり私は自分と言葉との出逢いから、いや「私」という個体の核をかたちづくるものと言葉の源泉をなす薄暗い場所に充満した沈黙と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

の出逢いから、考えはじめなければならないであろう。この出逢いがおこり得たのは、言語の習得がはじまるより前、つまり私が母のふところに抱かれていた嬰児の頃だったにちがいない。ここで私は、嬰児にとって一般に言語活動とはなにかというような発達心理学上の問題を、自分を実例にして考えてみたいわけではない。しかし成長して言葉の洪水のなかに身を投じる前に、私にもまたひとつの充実した沈黙があったはずである。それがなんであったかをたしかめるところから、私ははじめなければならない。

つまり私は、母と自分との関係をたしかめるところからはじめなければならない。しかし私はここで、ひとつの皮肉な逆説のとりこにならざるを得ないことを感じている。母は三十年前から不在の世界にはいってしまっているので、私は母と自分とのあいだにあったはずの沈黙に聴きいるために、言葉に頼らざるを得ないからである。母と私をへだてる距離は大きい。それは果して私とあの沈黙とのあいだの距離が大きいということだろうか？

II　アルバム

母の記憶の手がかりとなるものとしては、私は一冊の古びたアルバムを持っているだけである。そのほかの遺品や写真などは、みんな戦災で焼けた。なぜ父が荷物の疎開をためらっていたのかは、いまもって私にはよくわからない。大久保百人町の家の納戸には、母の遺品類だけではなく、祖父や祖母の品物もはいっていたので、父がそれらに愛着を感じないはずはなかったからである。

あるいは父は、戦争中だれでもがそう考えたように、他所の家が焼けても自分の家だけは助かると考えていたのかも知れない。そして納戸の荷物を鎌倉の疎開先に移した場合に、母にまつわる品物を義母や弟妹たちの眼にさらすことになるのを憚ったのかも知れない。私は病弱だったので、戦争がはじまる少し前に鎌倉に転地させられていたが、この家は義理の祖父、つまり義母の父の隠居所のすぐ近くにあった。そういうことも、あるいは納戸に手をつけるのを父にためらわせる一因になっていたかも知れない。

いずれにせよその頃の父のやり方には、常識的に考えると不可解なことが多かった。「疎開が面倒くさかった」という父の説明がほとんどなにも語っていないことはいうまでもない。父はおそらく一面では納戸が焼けてしまうことを願いながら、他の半面ではそれが絶対に焼けずにいてくれることを願っていたにちがいない。ついに五月二十五日の空襲で、大久保の家が直撃弾を受けて全焼したとき、父はその焼跡を見に行ってガックリと肩を落し、明らかに荒廃を全身にただよわせて鎌倉に戻って来た。父は多分再婚によってできあがった人工的な秩序と、それにもかかわらず実在した心理的な現実との落差を、どう調整したらいいかにとまどいつづけていたのである。こういう彼にとって、おそらく戦争そのものよりも家庭の内部の問題のほうが、はるかに重くて危機感に充ちた問題だったことは想像に難くない。

しかし私は、こうして母の痕跡が自分の周囲から喪われてしまったことについて、永いあいだひそかに父を恨んでいた。それはいわば自分の存在の核につながる記憶を抹殺されることだからである。自分の大久保の家に対する異常な執着を思うたびに、私はあの家が自分にとって単なる

建物以上のものだったことを思い知らされる。単なる建物としてみれば、それは震災以前の東京山の手の住宅様式の平凡な一例にすぎない。犬山の明治村で駒込千駄木町五七番地から移された鷗外・漱石の旧居をはじめて見たとき、私は細部や規模は別としてこの家が大久保の家と同じ建築思想にもとづいて建てられているのをなつかしく思ったことがある。しかしあの大久保の家は、おそらく私にとっては母そのものの象徴だったのである。そして母の死後、その道具の大部分が実家にひきとられていったあとでもなお母の記憶がただよっていた納戸は、多分私にとって母の胎内に等しい役割を果していたにちがいない。

現在私の手許にあるアルバムは、家が焼ける一年ほど前に私が鎌倉に持って行っていたものである。そこにはりつけられているのは大体三歳ぐらいの私を中心にしたありふれた家庭スナップであるが、いま私は自分のなかにあるおぼろげな母の記憶が、いったい本当の記憶なのかそれともこのアルバムを見ながら自分でつくり出したにせの映像なのか、どちらとも決めかねている。母の記憶はそれほど漠然としていて、遠い。しかしそれとは矛盾するようでいてやはりたしかなことは、私がそれにもかかわらず自分のなかにかすかな母の現存を感じているということだ。いわばそれは靄のようなもの、あるいは薄明のなかから匂って来る花の香りのようなものにすぎない。だがこの靄や香りには質量があって、私はそのかすかな重みを疑うことができないのである。

一枚のスナップ写真では、私は縁側に坐った母に抱かれて乳を吸っている。母はうつむき、日ざしをうけた顔の半面だけを白く浮き出させている。とうの昔に離乳期をすぎていて、甘えて乳を吸っているにすぎないらしい私は、てれたように上眼づかいにこちらを見ている。母の胸は少

ししか開かれていないので、乳房のかたちはよく見えない。

このときのことは少しも私の記憶にのこっていない。おそらく私は、こうして乳を吸いながら父に写真をとられていたとき、幼児がそういう場合にいつも感じるような安息と満足感にひたっていたにちがいない。つまりそこにはひとつの沈黙があり、言葉を必要としない理解というものがあったにちがいない。しかし私にはこの沈黙がどんなものであったかを喚起する能力がない。私はこの写真をとられたときの自分にはあったはずの安息を、もう決して思いおこせないからである。

母の声も私は明瞭には覚えていない。なんでも明るい澄んだ声だったような気がするが、それは祖母が母を呼ぶ、

「廣さん」

という声の記憶にかき消されて、はっきり耳に浮んでは来ない。母は廣子といった。そしてその母を祖母は「廣さん」と呼んでいた。呼ばれたとき、母はただちに「はい」とか、「はい只今」とか答えたであろう。その声を思い出したいと思うが、どうしても浮んで来ない。

私がこのようなあいまいな記憶に頼るほかないのは、父や親類の者と母のことを語りあう機会がほとんどなかったからである。六人兄弟だった母の兄弟のうち四人はすでに死んでいる。生存している叔父とは永いあいだ逢っていないし、母とは腹ちがいの叔母は現在外国に住んでいる。当然のことながら母の死後、母の実家と私のあいだには交渉がなかった。わずかに私が母のことを聞けたのは、他家を継いだ父のすぐ下の弟の妻である叔母からである。

それによると、母が私を産んだあとで病院に見舞いに行った叔母は、産後にもかかわらず母が身じまいして化粧を欠かさない様子なのにおどろいたという。叔母が従妹をつれて大久保の家を訪ねると、母は従妹の柔い頬を指でつついて、

「こいチュめ、こいチュめ」

といってボンボンをくれたそうである。その態度はやさしくて、本当に従妹が可愛くてたまらないというふうだったと叔母は大分前に述懐したことがある。母は私にも同じように、「こいチュめ、こいチュめ」といったのであろうか。この叔母とも私はずい分永いこと逢っていない。

そんなわけで、先日私は母の母校である日本女子大学の附属図書館にお勤めの相馬文子先生にお願いして、学籍簿の写しを送っていただいた。母の映像を少しでもはっきりさせる手がかりが得られればと思ったからである。相馬先生は故相馬御風氏の令嬢で、目白の国文科を卒業された方である。この相馬先生を私に紹介して下さったのは、昨年『犬と私』という随筆集を出して下さった三月書房主の吉川志都子さんである。吉川さんはやはり目白の卒業生で、趣味で小型本随筆集の出版をされている家庭婦人である。

その学籍簿からは、いかにも昭和初年の女子大生らしく銘仙らしい着物に銘仙らしい羽織を重ねて耳かくしにした母の写真が、勝気そうな眼をみはってこちらを見つめている。英文科の二十八回生で成績は上の上、卒業論文の題は「Japan, before and after the National Isolation」である。趣味の欄には「洋楽、絵画、国際問題、婦人問題、社会問題、政治、家事、文学」の順

に記入されている。ここに国際問題がはいっているのは場違いな感じだが、あるいはこれは同じ学籍簿に予備海軍少将と書かれている祖父の影響かも知れない。祖父は駐英大使館付武官をしていたことがあったからである。そして母の「係」は「国際聯盟係」である。

性質は「快活、物にこだわらず、意志固し」とある。信仰の欄には「真心の愛」と書かれ、志望には「女学校の教師、或は Secretary」と書かれている。そこにはまた体重四十九キロ、身長百五十五・六センチ、視力左右一・〇というひどくなまなましい記述がある。そしてさらに家族の状態に「一同健康」とあり、当人の健康の欄に「強健」と書かれているのを発見したとき、私はある激しいアイロニイを感じずにはいられなかった。死んだときの母はいまの数え方でいえば二十七歳にすぎなかったからである。

だがここから浮びあがって来る知的で勝気そうな娘の映像は、私の漠然と覚えている母の映像とはそのまま重りあわない。それを「快活」と表現するのが当っているかどうか知らないが、たしかに母は明るく、人目に立つ女であった。母に連れられて外出すると、みんなが振りかえってみるので私は得意だったからである。私はそういう母につれられて、女子大のクラス会らしい会合に行ったことがある。そのとき何人か母の同窓生に洋装している人がいたので私はおどろいた。私の知っている母はいつも和服を着ていて、「女学校の教師、或は Secretary」を志望したりしたハイカラ娘の面影はまったくなかったからである。そのクラス会でも母はいかにも若奥様風の和服姿で、その周囲には知的なというよりは家庭的な雰囲気がただよっていた。

母がエジプト更紗模様のカーテンの余り布で、私の小さな本箱につけるカーテンをつくってく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo